

子どもの目、

教師の目

矢吹伸一



S 小学校を離任する日、Tさんがかわいらしい笑顔で、私の前に立った。そして手紙を読み始めた。

「先生には心配ばかりかけてごめんなさい。だけど、これからは中学生だからもつとしっかりして。」

おこづかいで買った花瓶とご両親からの手紙を添えたプレゼントに、私の目は潤んだ。

Tさんの不登校が始まったのは、五年生の三学期からだ。生徒指導を担当する教師として私に関わったのは、Tさんが六年生になつてからである。家庭訪問でのご両親の相談と担任の情報から、不登校の原因となつた要因が見つかった。腹痛で父親に学校まで送つてもらつた日、先生は「具合の悪い時は無理をさせないで休ませます」と本人と父親に約束した。そして体育の時間、Tさんが不調を訴えると、「もう少しがんばってみたら。」という先生の言葉。Tさんにとってみれば、約束違反の言葉であり、教師にとってみれば、

励ましの言葉だつたにちがいない。そんな行き違ひのやりとりが不登校のきっかけになつたりする。

本人の心の弱さは両親も認めてい

るし、ただ毎朝元気に自分の力で登校してほしいという願いひとつである。担任も学年の先生方も彼女への指導に腐心した。わがままと思われ

る事にも、まず本人の意志を重視することから学級の取り組みが始まった。やりたい係、気の合う友達と触

れ合える座席、熱中したものに自由に組み組める時間の確保など、集団生活では特別扱いと思われるような事である。私は、家庭でのTさんの

生活ぶりを両親から聴き、担任や先生方のTさんに対する愛情の深さをその都度両親にお話した。担任は

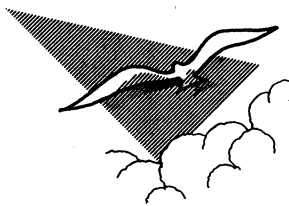
欠席しても遅刻しても温かく見守る態度を一貫して取り、登校した時は、

学校での様子を両親に報告し続けた。学級の子どもたちの思いやりもあつて、Tさんは不登校から立ち直り、一人で登校できるようになると

自然に集団生活のきまりやけじめなどを自分の口から言いだすようになった。自分を取り巻く家庭・学校・友人・先生の熱い愛情とやさしさに気づいたのである。Tさんが、教師との信頼関係を回復し、周囲との関わりを意識し始めてくれた。

子どもの目と教師の目を同じにしなければ信頼関係は保てない。子ども心の奥底に触れて初めて子どもの思いがわかる。どんな子であっても、その子にとって学校と教師は、いつも自分を見つけていてくれるかけがえない信頼できる存在でなければならぬのである。

(石川町立野木沢小学校教諭)



原点

阿部秀昭



相馬郡飯館村立飯樋中学校。今はもう存在しないこの学校が、私の教員生活のスタートの地になつた。

飯館村は、今でこそユニークな村おこしや飯館牛、ふくしま駅伝「村の部」三連覇などで有名であるが、十年前に辞令をいただいた時の私には、どこにあるのかすら分からない所だつた。しかし、その地が私にとって生涯忘れることのできない、いや、忘れてはならない思い出深い地になつた。

自分が教師として勤まるのだろうか、誰しもが初任時には抱く不安ではなかつた。私も、もちろん例外が駅伝である。高校、大学と陸上部に籍を置き、中・長距離走をやつて